



TITLE:

Obesity matters but is not perceived: A cross-sectional study on cardiovascular disease risk factors among a population-based probability sample in rural Zambia(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

Tateyama, Yukiko

CITATION:

Tateyama, Yukiko. Obesity matters but is not perceived: A cross-sectional study on cardiovascular disease risk factors among a population-based probability sample in rural Zambia. 京都大学, 2019, 博士(医学)

ISSUE DATE:

2019-03-25

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k21670>

RIGHT:

京都大学	博士（医学）	氏 名	立山 由紀子
論文題目	Obesity matters but is not perceived: A cross-sectional study on cardiovascular disease risk factors among a population-based probability sample in rural Zambia （肥満は問題だが認識されていない：ザンビア農村部におけるポピュレーションベースの確率サンプルを用いた心血管疾患リスク要因に関する横断的研究）		
（論文内容の要旨）			
【背景】			
ザンビアを含むサハラ以南アフリカは、近年の経済成長に伴う急速なライフスタイルの変化により、血管疾患の重要なリスク要因となる過体重・肥満が増加しつつあるが、ザンビアにおける過体重・肥満に関連する研究は不十分であり、特に生物学的マーカーを用いた研究はほとんど存在しない。そこで、本研究では、過体重・肥満の有病割合およびその関連要因を血液と尿の生物学的マーカーを用いて検討した。さらに、対象地域の社会文化的背景を踏まえ、住民の体重管理において重要な役割をもつと考えられる体重への自己認識とその関連要因を検討した。			
【方法】			
本研究は横断的研究である。ザンビア中央州ムンブワ郡在住の 25～64 歳の男女を対象に、多段階抽出法を用いて 800 名を選定した。2016 年 5-8 月にかけて、構造化質問票を用いたインタビュー調査および身体・生物学的データの計測を行い、多重ロジスティック回帰分析により過体重・肥満（体格指数[BMI]25 以上）および自己体重の過小評価に関連する要因について評価した。			
【結果】			
解析対象者中（男性 335 名、女性 354 名）、185 名（26.8%）が BMI25 以上であった。多変量解析では、女性、45-64 歳、高等教育以上、果物・野菜の高頻度摂取、血圧高値、血中脂質異常、HbA1c5.7 以上について、BMI25 以上と有意な関連が認められた。BMI25 以上の参加者において、14.2%が自身の体重を「痩せている」、58.2%が「標準」であると認識しており、年齢 45-64 歳のみが自己体重の過小評価と有意に関連していた。また、BMI 25 未満の参加者の 17.5%および BMI25 以上の参加者の 3.6%が過体重を好むと回答し、その主な理由として、「魅力的にみえる」、「裕福に見える/貧困にみられたくない」、「病気に見られるのが怖い」「健康に見える」が挙げられた。さらに、「病気に見られるのが怖い」と回答した中のほとんどが「HIV 感染を疑われるのが怖い」を理由に挙げていた。			

【結論】
ザンビア農村部において、過体重・肥満が蔓延しており、血圧高値、血中脂質や糖代謝の異常が関連していることが示唆された。しかし、BMI25 以上を有する参加者の多くが、自身の体重を過小評価しており、さらに文化的要因および HIV に関連するステイグマにより、肥満体型が好まれていることが明らかとなった。したがって、ザンビアにおいては、体重の自己認識を是正するための健康増進プログラムの早急な導入が必要と考えられた。
（論文審査の結果の要旨）
本研究は、急速なライフスタイル変容が進みつつあるザンビア国において、過体重・肥満の有病割合とその関連要因等の検討を目的に 2016 年に実施された横断研究である。同国中央州の農村部ムンブワ郡にて、多段階抽出法により、25～64 歳の男女 800 名を抽出し、690 名（86.3%）から有効回答を得た。構造化質問票による面接調査及び身体・生物学的データの計測を行い、統計解析は多段階抽出とクラスター性を考慮し、多変量解析にはロジスティック回帰分析を用いた。
参加者中、男性 16.3%、女性 36.7%が体格指数（BMI）25 以上であり、男性では、45–64 歳、喫煙、高い身体活動、血中脂質異常、女性では、45–64 歳、高等教育以上、果物・野菜の高頻度摂取、心理的苦痛スコアの高値、血圧高値、HbA1c5.7 以上が、BMI≥25 と有意に関連していた。BMI≥25 の参加者では、14.2%が自身の体重を「痩せ」、58.2%が「標準」と過小評価しており、高年齢層（45–64 歳）でその傾向が強かった。
以上本研究は、ザンビア農村部において、特に女性における過体重・肥満の集中、過体重・肥満に関連する要因の男女差、自己体重の過小評価の実態を疫学的に明らかにし、今後の同国及び同様の問題を抱える途上国における健康増進に必要な視点を示唆したもので、公衆衛生学的施策の発展に寄与するところが多い。
したがって、本論文は博士（医学）の学位論文として価値あるものと認める。
なお、本学位授与申請者は、平成 31 年 2 月 21 日実施の論文内容とそれに関連した試問を受け、合格と認められたものである。

要旨公開可能日： 年 月 日 以降